

ツルギ古墳の国産鍛冶具

今から約四〇年前、小座東高尾での造成工事中に、丘陵の斜面から古墳時代の須恵器と鉄製の鍛冶具が見つかりました。工事中に見つかったもののなかで、出土状態は明らかではありませんが、須恵器と共に見つかったことと、周辺にいくつかの花崗岩の巨石が見られたことから、横穴式石室をもつ古墳に納められていたものではないかと推定されています。

鍛冶具というのは、鉄を加工して刃物や農具などを作る鍛冶職人の道具のことです。

「ツルギ古墳」と名付けられたこの古墳から出土した鍛冶具は、童謡「村のかじや」の歌詞にも出てくる、鉄を成形するために叩く鉄鎚、熱い鉄をはさむ鉄鉗、鉄を削ったり加工したりする鑿（くわ）と思われる棒状の鉄製品（鉄製品）の三点です。共に出土した須恵器の形から、七世紀後半頃のものであるとされています。美作では、六世紀後半頃の製鉄跡が見つかっていますので、ツルギ古墳の鍛冶具が使用されていた頃には、すでに中国山地でも鉄が作られ、鍛冶職人による鉄製品の製造も行われていたようです。



鉄鎚(上)と鑿(下)



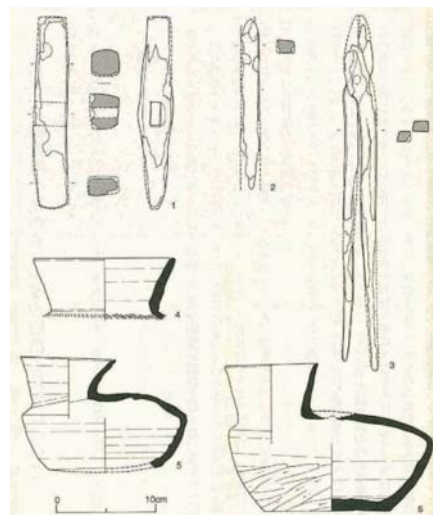
ツルギ古墳出土の鉄鉗

ツルギ古墳出土の鍛冶具は、この地域で鉄製品の製作が行われていたことを証明するもので、この古墳に埋葬されていたのは、鍛冶職人であったといえるでしょう。

こうした鍛冶具は、近隣の町でも見つかっています。五世紀末～六世紀初頭の長畝山二号墳（津山市国分寺）からは、鉄鎚・鉄鉗が、五世紀後半の西吉田北一号墳（津山市西吉田）からは鉄鉗・鑿が出土しています。

これらの古墳から出土した鉄鉗は、金属の成分を分析する調査を行っています。その分析調査の結果、長畝山二号墳・西吉田北一号墳の鉄鉗は、磁鉄鉱石を原料とするもので、朝鮮半島からもたらされたものでした。一方、ツルギ古墳出土の鉄鉗は、砂鉄を原料とする国産の可能性が高いというデータが出ました。

これらのことから、美作における鍛冶は、製鉄が始まる以前からすでに行われ、当時は道具も材料も大陸からの輸入品を用いて行い、最新かつ特殊な技術でした。長畝山二号墳は、その規模や副葬品の内容共に、長畝山古墳群中では卓越した存在であることが指摘されていることから、鍛冶職人を統轄する者の墓であったことがうかがえます。こうして津山盆地にもたらされた



ツルギ古墳出土遺物実測図

鍛冶具は、たたら製鉄の開始によって鉄が入手しやすくなるとその需要が高まり、やがては国産の道具も生産され、近隣の村々へも広がっていったのでしょう。その過程で鍛冶具を入手した一人がツルギ古墳に葬られた人物でした。

塚谷のゴンバサ散布地では、古墳時代後期から奈良時代と推定される製鉄跡が見つかっています。もしツルギ古墳の時代と重なるのであれば、この付近に製鉄から製品の製作までを行う一大コンビナートがあったのではないかと、想像をかき立てられます。ツルギ古墳の鍛冶具は、鏡野郷土博物館（ペスタロッツ館2階）にて展示しています。

参考資料：『鏡野町史』考古資料編・通史編、
『美作の歴史』、『西吉田北遺跡』、
『岡山県埋蔵文化財報告18』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733